

## ▼ブレオ注射用 [注]

【重要度】★★★【透析患者に投与禁忌】 【一般製剤名】ブレオマイシン塩酸塩 (BLM) (U) bleomycin hydrochloride 【分類】抗腫瘍性抗生物質

【単位】▼5mg・▼15mg/V

【用量】添付文書参照

【用法】原則週2回投与

【透析患者への投与方法】重篤な腎機能障害時には禁忌 (1)

【その他の報告】腎機能正常者の50%の投与量で、投与間隔は正常者に同じ (4,10) 正常者の1/10~1/20の用量 (U) 腎不全患者ではt1/2が延長し、肺毒性のリスクが上昇するため、投与を避ける (Cancer Treatment Review 21: 33-64,1995) 50%に減量 (3) データがなく提示できない (17)

【PD】データなし (17)

【CRRT】25%に減量 (17)

【保存期 CKD 患者への投与方法】重篤な腎障害には禁忌であり代替薬を使用する。Ccr>50mL/min : 減量の必要なし, Ccr 10~50mL/min : 75%に減量, Ccr<10mL/min : 50%に減量 (1,5,12)

【その他の報告】Ccr>10mL/min : 常用量, Ccr<10mL/min : 50%に減量 (10)

GFR>50mL/min : 減量の必要なし, GFR 10~50mL/min : 75%に減量, GFR<10mL/min : 50%に減量 (3)

【特徴】細胞のDNA合成後期および分裂期に作用し、DNA鎖を切断する放射線類似作用を有する。時間依存性で濃度依存性でもある。血液毒性がほとんどないため他の抗ガン剤と併用しやすい。悪性リンパ腫、種々の扁平上皮癌に有効

【主な副作用・毒性】間質性肺炎、肺線維症、ショック、出血、脱毛、皮膚・爪の変化、食欲不振、口角炎、乏尿、頻尿、残尿感、貧血、白血球減少、頭痛、めまい、発熱など

【安全性に関する情報】60歳以上の高齢者では、間質性肺炎又は肺線維症が発現しやすいので慎重に投与 (1) ヒドロラーゼにより不活化されるが、その酵素の遺伝的多型が肺毒性の発現している証拠はない (Nuver J, et al: Pharmacogenet Genomics 15: 399-405, 2005) 発熱は投与後4~5時間あるいはさらに遅れて発現することがある。発熱と1回投与量との間には用量反応性があるので、発熱が強い場合は投与量を減量し、投与間隔を短縮するか、本剤投与前後に抗ヒスタミン剤、解熱剤を投与するなど適切な処置を行う (1)

【モニターすべき項目】肺の聴診、胸部X線、血清BUN・クレアチニン、肺機能 (一酸化炭素肺拡散能など)

【吸収】経口投与した場合ほとんど吸収されない (11)

【F】腹腔内投与で45% (U) 経口では吸収されない (14) 胸水、腹水中投与では45%が循環血中に吸収される (U)

【代謝】不明だが、おそらく組織の酵素で分解される (U) 活性代謝物があるかどうか不明 (U) 一部がアミノペプチダーゼにより脱アミノ体に代謝 (1) 代謝物に活性はない (1)

【排泄】尿中未変化体排泄率60~70% (U) 68% (13) 55% (14) 60% (12) 腎不全では著しく低下 (U) 【CL】87mL/min (10) 44.8mL/min/kg、腎障害で低下 (13)

【非腎CL/総CL】45% (10)

【t1/2】Ccr 35mL/min以上で115minであるが、Ccr 35mL/min未満ではその低下に伴い指数関数的に半減期は延長 (U) 1.3~9hr (2,10) 3hr (6,10,14) 2~4hr (11) 3.1hr、腎障害で延長 (13) 9hr (12) 【透析患者のt1/2】2~30hr (2,10) 10hr以上 (6) 20hr (12)

【蛋白結合率】1% (U)

【Vd】0.34L/kg (10,14) 0.25L/kg、腎不全でも変化しない (Cancer Treat Rep 61: 1631,1977) 9.7L/m<sup>2</sup> (13) 0.3L/kg (12)

【MW】~1500 (11) 1487.47 (BLM-A2)

【透析性】おそらく除去されない (U, Crooke ST, et al: Cancer 39: 1430-4, 1977) 資料なし (1)

【TDMのポイント】一般的にTDMは実施されていない【O/W係数】資料なし (1)

【相互作用】胸部およびその周辺へのradiationは行わない (1)

【備考】【警告】間質性肺炎・肺線維症等の重篤な肺症状を呈することがあり、ときに致命的な経過をたどることがあるので、投与中および投与終了後の一定期間 (およそ2カ月位) は患者を医師の監督下におく。労作性呼吸困難、発熱、咳、捻髪音 (ラ音)、胸部レントゲン異常陰影、A-aDo2・Pao2・DLcoの異常などの初期症状があらわれた場合には直ちに投与を中止

【更新日】20160204

※正確な情報を掲載するように努力していますが、その正確性、完全性、適切性についていかなる責任も負わず、いかなる保証もいたしません。本サイトは自己の責任で閲覧・利用することとし、それらを利用した結果、直接または間接的に生じた一切の問題について、当院でいかなる責任も負わないものとします。最新の情報については各薬剤の添付文書やインタビューフォーム等でご確認ください。

※本サイトに掲載の記事・写真などの無断転載・配信を禁じます。すべての内容は、日本国著作権法並びに国際条約により保護されています。